

# 国語科

## 読書指導を意識した「文学史」教育の試み

長谷川 弘

【抄録】活字離れの甚だしい高校生にたいして文学史の学習を通して読書指導をしている。高1の生徒に1年間で10時間程度を使い、文学史の説明は少しにして、できるだけ読んで欲しい作品の紹介をする。その際、数多い文学史上の作品からどの作品を選べばよいのか。その基準を「おもしろいもの」「生徒にとって身近なもの」「感動させるもの」という観点にしぼって紹介する作品を選んだ。

【キーワード】読書指導・文学史教育・作品選択基準

### 1. はじめに

中・高生の読書離れが言われて久しい。その対策として、図書館教育が中心となり各教科、特に国語科が協力して読書指導をしているのが、一般の読書教育の現状であろう。

この小論では、高校生がどうしたら読書するようになるのか、それを近代文学史（以下、単に文学史と記す）教育という観点から考えてみた。

### 2. 文学史教育を行う時期

各高等学校において文学史の教育はどのようにしているのか。調査はしていないが、筆者の経験から言えば文学史のテキストを持たせて実力考査の範囲にしたり、3年で補習をし大学受験に備えている程度ではなからうか。

筆者の今までの文学史指導は、高1（つまり国語1）の定期考査の範囲にして、1年間で終わらせた。そして授業は5回の定期考査の直前1～2時間で簡単にテスト範囲内を説明した。

文学史の教育は指導要領の上では「第4 現代文」の「3 内容の取扱い」の（3）にあるだろう。そこでは「近代の文章や文学の変遷については、作品の読解、鑑賞の参考になる程度とする。」とある。これを考えると文学史の指導は「現代文」で行うのが適切かもしれない。しかし問題は「現代文」は選択科目で、さらに「現代文」は（本校でも）高2又は高3で習う科目だということである。つまり筆者は文学史の指導は高1で行うのが適切だと考えているのである。この理由を次にのべたい。

そもそも筆者が文学史に興味を持ったのは、高1生徒から夏休み読書感想文のための本について相談されてからである。考えてみれば本を日ごろ読んでいない生徒にとっては「何を読むべきか」は大問題である

う。そういう生徒は、選んだ本がつまらなければ次の本を読むということをしてない。そんな面倒なことをするより、それを我慢して読んでしまう。そして読書感想文では「つまらなかった」。

そういうわけで、読書指導が最初にあって、そのために文学史の指導をするようになったのである。が、高校の2年も過ぎるとほとんど本を読む時間がなくなってくる。だから読書指導を目的として文学史の教育をするとすれば、高校2年以上で行ってもあまり意味がないことになるのである。

### 3 筆者の今までの文学史教育

筆者は今年度も文学史を5回に分けて、定期考査の範囲にしている。テキストは「日本文学史（数研出版）」である。

- ①明治18年～明治末（自然主義まで）
- ②明治末（反自然主義）～大正末
- ③大正末（プロレタリア文学）～昭和20年
- ④昭和20年～昭和30年（第3の新人）まで
- ⑤昭和30年以後～現在まで

上のようにテストの範囲を決めたわけだが、これは今まで長年行ってきたテスト範囲と少し違う。今まで明治18年までの部分も範囲としてテストではほとんど出さない、戦後から現在までの文学はすべて一括して1回分のテスト範囲とした。このことは、今までの実践が明治・大正を中心とし、戦後を軽んじてきたことを示している。つまり大学入試の傾向を踏まえて行ってきたわけだ。

が、鷗外・漱石が「古典」になりつつある現在、読書指導という観点から文学史教育を考えた場合、やはり現代の文学を重んじるべきだ。このように考え、今年度は上に示したようなテスト範囲とした。

ただしもうすでに反省点はある。それは②の部分はどう扱うかである。鷗外・漱石が古典になりつつある

といっても、やはり二人は近代文学史の巨峰である。さらにこの②の時期で、谷崎・荷風・志賀・茶川という文豪たちが出て来る。また夏休みの読書指導を考えてもこの時期の作家たちは重要である。そう考えるとやはりもう少し範囲を狭めてじっくり生徒に教えたくなってくる。

#### 4 文学史授業での作品紹介

##### (1) 方針

読書指導という観点で小説作品を紹介する場合、その作家の代表作品、文学史上の重要作品を紹介しても意味はない。最も大切なことは、「生徒が読んでおもしろく思う」作品でなければいけない。そういう意味では物語性のある作品がよい。ただし作品によっては冒頭部分が退屈だったりするものがある。そういう場合は生徒にそのことを話し、作品内容・あらすじを興味深く説明する必要がある。

次に大切なことは「生徒に身近な」作品を選ぶことだ。これは登場人物、テーマ、表現すべてにいえる。例えば主人公の年齢はできるだけ高校生に近い方がよい。テーマは恋愛・友情・将来の生き方などについて。やはり青春小説と呼ばれるものが無難である。表現は生徒に難解なものだと考えたらやめた方がよい。以上を考えると、鴎外の史伝、漱石の卓枕など、生徒にとってとはとんなものだろうか。また、例えば谷崎の作品を読ませたい場合「痴人の愛」と「春琴抄」のどちらかを紹介すればよいのか。前者の方が読み易いだろうが、生徒は果しておもしろく読めるのか。また後者は物語としておもしろく読めそうだが、何か所かある擬古文に生徒はついてこられるのか。生徒に紹介する前によく検討する必要がある。

三つめには、生徒を「感動させ、読後カタルシスの訪れる」作品でなければならない。つまり単なる「読物」でなく、芸術作品だということ。こういう作品が発達段階にある生徒を成長させるし、さらに読む行為から書く行為へと生徒を導くからである。

最後にやはり「分量」が関係してくる。あまりに長い長編では読むのは大変だろう。その他、文庫になっている作品とか、図書館にあるとか、生徒が実際にその作品を手取るように適切な指導をしたい。

##### (2) 具体例

###### ①明治18年～明治末（自然主義まで）

読書指導を踏まえた作品紹介としてはまず二葉亭の「浮城」である。近代文学史の出発にあたる作品として、かつまたその言文一致の文体は生徒が読んで理解できよう。また「あひびき」等の翻訳もので、先駆的言文一致の文章に触れさせてもよい。

次に国木田独步の諸知編、特に「牛肉と馬鈴薯」は

テーマが理想と現実の相克という高校生には身近なものであろう。他には「画の悲しみ」等、教科書にも採録された作品などを紹介してもよい。

最後は藤村の「破戒」。日本自然主義文学の記念碑として、またその社会性をもった重厚さといい、この作品の生まれたときの藤村のエピソード等を紹介しながら生徒には興味を持たせ、ぜひ読ませたい。

###### ②明治末（反自然主義）～大正末

漱石 三四郎 鴎外 高瀬舟  
 実篤 友情 直哉 城の崎にて  
 有島 小さき者へ 茶川 羅生門

この時期の作家の作品は教科書に載っているものが数多くあり、生徒にも親しめるであろう。上に記したものは多くが短編であり、一つを選ばせて簡単な感想文を出させる。そして夏休みの宿題として、特に漱石を全く読んでいない生徒にはその代表作を読ませたい。

授業は漱石・鴎外を中心に大正の白樺派と茶川でよいと思う。

###### ③大正末（プロレタリア文学）～昭和20年

川端 伊豆の踊子 堀辰雄 風立ちぬ  
 太宰 走れメロス

そのほか井伏、梶井、中島、北条民雄など独特な魅力を持つ作家・作品にも触れたらどうだろう。授業ではそれら芸術派を中心に、プロレタリア文学の簡単な説明でよかろう。

###### ④昭和20年～昭和30年（第3の新人）まで

太宰 斜陽・人間失格 三島 潮騒  
 原民喜 夏の花 福永武彦 忘却の河

新戯作派、戦後派の作家、第三の新人と説明するわけだが、との作家・作品に重点をおき紹介していくかは授業者の好みに左右されてしまう。まず「生徒の読める作品」というのが第一の条件。次に戦争文学をどう取り扱うのか。生徒の実態を考える必要があるだろう。

###### ⑤昭和30年以後～現在まで

ここからはグループ・主義によって分けることが不可能になってくる。また中間・大衆小説をどう扱うか、また何をもって中間小説にするか、など難しい問題がある。それだけに授業者の自由に扱うことのできる分野である。筆者は以下の作家を紹介したい。

大江健三郎 新しい人よ眼ざめよ・人生の親戚  
 村上春樹 風の歌を聴け・ノルウェイの森  
 宮本 輝 春が散る  
 庄司 薫 赤頭巾ちゃん気をつけて  
 高樹のぶ子 時を青く染めて  
 北 杜夫 ドクトルマンボー青春記  
 深沢七郎 橋山節考

## 5 最後に

筆者が文学史を教える場合、生徒には「受験に備えて高1からできるだけ覚えておこう、後で楽だよ」と最初に言う。しかし本来それが目的であってはならない。高校での文学史教育の目的は、それを学ぶことによって「本を読んでみよう」という気持ちを生徒に持たせることだ。

少しでも生徒に知的興味を持たせたいというのはすべての教師の願いだが、国語の教師にとってそれは生徒に読書してほしい、ということになるだろう。そのためにはどうすべきか。この小論では「文学史」教育という観点から考えてみたわけだが、他にはどんな方法があるか。これからも筆者の課題にしていきたい。またどの作品を紹介するかは非常に悩む部分である。生徒にアンケートを取るなどして客観的な資料作りをこれからしていきたい。